

とこしえの

宝玉

『アイヌ神謡集』

の発刊

幸恵が命をかけて完成させた『アイヌ神謡集』が刊行されたのは、幸恵の死から1年後の1923年（大正12年）8月のことでした。幸恵は生前に校正を済ませていました。

『アイヌ神謡集』の本文は13の神謡で構成され、アイヌ語と日本語との対訳形式で、アイヌ語はローマ字を用いて表記されています。

金田一は「神謡集のあとがき（知里幸恵さんのこと 追記）」で次のように結び幸恵の死を惜しんでいます。



「種族内のその人の手に成るアイヌ語の唯一の此の記録はどんな意味からも、とこしへの宝玉である。唯この宝玉をば神様が惜しんでたつた一粒しか我々に恵まれなかった。」と。

晩年の金成マツ。幸恵の意志を継いで膨大な量のユーカラをローマ字の表記で書き残す。

ふるさとに眠る

〜終わりに〜

幸恵は暖かい父母の懐にいだかれ最も幸福な時期にあった生誕の地登別を回想し、『アイヌ神謡集』の序文を書いています。

幸恵の亡骸は、1975年（昭和50年）登別に改葬されました。6歳で両親のもとを離れ、幸恵は今、太平洋を一望できるリフルカ（高い・丘の・上）にある富浦墓地に、両親にいだかれ安らかに眠っています。



幸恵の墓・マツの碑

【主要文の引用と資料貸与協力】  
財北海道文学館、北海道ウタリ協会  
登別支部、知里真志保を語る会、知里森舎

知里幸恵年譜

- 1903（明治36）6月8日、知里高吉、ナミの長女として登別に生まれる。生後まもなく両親の意思で受洗する。
  - 1907（明治40）弟高央生まれる。
  - 1909（明治42）弟真志保生まれる。この秋、旭川近文の日本聖公会で布教活動をする伯母金成マツに預けられる。祖母モナシノウクとの3人暮らし。
  - 1910（明治43）川上第三尋常小学校に入学。9月、近文に川上第五尋常小学校（のち豊栄尋常小学校と改称される）が開校、移籍する。11月、「近文休養館」（近文日曜学校）開館式行われる。マツはアイヌの女性に裁縫、読書などを教え、日曜学校も開く。
  - 1916（大正5）尋常小学校を卒業。川上第三尋常高等小学校に入学。
  - 1917（大正6）旭川区立女子職業学校に110人中4番で合格。
  - 1918（大正7）夏、アイヌ語学、アイヌ文学研究の金田一京助がジョン・パチラーの紹介でマツ、モナシノウクを訪ねる。初めて会った金田一は幸恵の語学の才を見抜く。
  - 1920（大正9）女子職業学校を卒業。気管支力タルを病む。金田一は、病気の幸恵にノートを送りユーカラなどのローマ字筆記をすすめる。9月豊栄尋常小学校（旧川上第五尋常小学校）開校10周年記念式典で祝辞を読む。11月ごろ、独自の表記法でユーカラなどの筆記を始める。年末、初めて書いた神謡稿を金田一に送る。
  - 1921（大正10）4月『アイヌ伝説集』ノートを金田一に送る。9月『アイヌ伝説集』其二、三のノートを金田一に送る。弟の真志保が加わりマツ、モナシノウク、幸恵、真志保の4人暮らしとなる。
  - 1922（大正11）神謡の草稿を『ノート』に書く。5月、上京し金田一宅に寄寓。8月、心臓病を発病。上京後につけていた日記は7月末で終わる。『アイヌ神謡集』の校正を終える。9月18日、心臓麻痺で急逝。
  - 1923（大正12）『アイヌ神謡集』が刊行される（東京・郷土研究社）。
  - 1961（昭和36）金成マツ、弟真志保死去。
  - 1970（昭和45）『アイヌ神謡集』補訂版が刊行される（札幌・弘南堂書店）。
  - 1971（昭和46）金田一京助死去。
  - 1973（昭和48）幸恵の評伝・藤本英夫著『銀のしずく降る降る』が刊行される（東京・新潮社）。
  - 1978（昭和53）『アイヌ神謡集』のエスペラント語訳が刊行される。岩波文庫に『アイヌ神謡集』が収録される。
- 「大自然に抱擁されて……知里幸恵『アイヌ神謡集』の世界へ」（財団法人北海道文学館編）より転記（一部省略）